

田黒稽古場だより

2025/10月

No.42

田黒稽古場 摂津東
〇〇〇(47-106) 11111
megurokeikojo@sf7.so-net.ne.jp

【九月稽古まとめ】

〈晴風〉

月間「全生」九月号に野口裕介先生の文章が載っている。その中の「見入る集注」の抜粋です。

「私は茶杓なんかと、ばかにいて

いたけれども、あれだけ丁寧に見

たら、茶杓を作った人に直接会つ

て、いろいろな気分になるだろう

など思いました。例えば、利休と

いう人に直接会つて、いたとした

ら、その茶杓から利休という人を

感じるのは出来ないかもしね。

ない。しかし、利休の作った茶杓

を、そこまで集注して見て、いった

ら、利休という人に非常に近く会

うことが出来るのではないか。だから、利休とい

う人が生きるのでないだろ

うか。却つて生きている人間の、

余分な「チャ」「チャ」したものを見

ないで、茶杓だけ見ている方

が、直接その人が見えていたので

はないだらうか。

・・・中略・・・

私はこの光景を見て、あ、これ

が要するに、愉氣なんだなあと思

つた。」

この文章を読んで、ある技術研

究員の言葉を思い出した。

「僕は、ダン先生が大切に育てて

いた「子息の方の稽古に出来るこ

とで、ダン先生に出来たような

氣がある。ダン先生の後姿が見え

て、この氣が、あんな氣がある。」

もしかつて、あるなら、ダン先

生の稽古に出たこと、晴哉先生

に出来たのではないだらうか。

では、晴哉先生に会つて、何

に出来たのだらうか。それに連

がる。

が手から道具を抜けば、スッと抜

れる。この腰領で、籌を握る。その筹

流れ。氣の流れが聞えるといふを

で置けば、筹巾も手首が水平に

上手く抜けば、氣の流れも盛り上

がつてくれる。

●茶動法

大阪の奥須賀さんにも教えても

いた稽古を参考にした。

「全力で道具に触るかど、その

道具は決して拘束しない。」

そのことを可能にするのが手

首のあめ方である。

手首の外踝と内踝を水平にす

るか、手首から先の掌や指に力が

入りなじよつの氣がする。

この手首の水平を保ちながら

道具に触れる。

触れたら、全力でつかむ。腹の

底から全力でつかむかど、手首か

ら先には云わぬ。

全力でつかんだ道具だが、相棒

が手から道具を抜けば、スッと抜

れる。

体に起こつてこの流れで立ち

上がる。

・人込みの中を歩く。など。

そなつて作つた場は、鑑を卓に
に置くのかが決まる。
いわゆる場に着座すれば、誰が
亭主か、誰が客か分かぬ。場が決
めてくれる。

●茶観（慈縁庵）

「暑やの處をも彼岸まで」と書ひが、猛暑だったのに急に秋らしくなった秋分の日。今回の慈縁庵での茶観は、松本さんにお願いして、「炭手前」を行つて頂きました。

松本さんには、道具や炭をお持ち頂き、灰を盛る下準備からお手前まで、全て任せっきりで大変だつたと思います。改めてお礼申上げます。

しかしながら、そんな大変な準備を淡々とこなしていく姿を見て、本当にお茶が身についているんだなと思いました。窓には大変さを見せない、悟りれない。なんか野口先生（晴風）と同じだなと思った。

稽古としては、大きなテーマとして、如何に身体を出すか。「我々現代人は、身体を操作するのではなく、身体という観念を操作するようになつてきた。触れるものすべて精神の形。どうすれば

ばかり身体に触れることがでゐるのか。それが稽古場の大きなテーマです。」とダン先生は言われる。今日は「間にに入る」ということから身体を引き出す稽古を行つた。

〈座取り〉

一、田を閉じて、身体を引きだす。「引き出された身体から場を観る」と場の残像が觀える。

三、その場の残像が体に吸い込まれて行く処がある。

引き込んだらゆつくり田を開けて、場を見れば、自分が座るべき座が、迷いもなく分かる。そこには精確に座れば身体が引き出され

ている。

その座は静かで何も起こらな

いような感じだが、亭主が差し出す茶が、自分のものか否かが分からぬ。つまり、どうして座るかとか、このお茶は私のものだろうかと迷いがない。体を観ていれば自ずから分かる。

